

研 究

乳幼児の保護者が感じる食行動の問題点と
食事の楽しさとの関連

大岡 貴史, 内海 明美, 向井 美恵

〔論文要旨〕

本研究では、乳幼児期の食行動や食習慣についての新たな支援方法の確立を目的とし、保育園児およびその保護者1,271組の食事について気になる点や食事の楽しさについて検討した。食事については、「かまない」が1歳児で、「時間がかかる」が3～5歳児で、「遊び食べ」は1～3歳児で有訴割合が高かった。一方、「食事量が少ない」は最も割合が高かった5歳児でも16%であった。食事の楽しさでは、「楽しく食べている」と回答した保護者は1歳女児で最も高く（94%）、4歳女児で最も低かった（81%）。また、食事の楽しさと気になる点の関連については、「食事量が少ない」、「食事量が一定しない」で特に高いオッズ比を示した。

Key words : 小児, 食事, 楽しさ, 不安内容, 要因分析

I. 緒 言

幼児期は食べる機能の発達や食事の自立が著しい時期であり、口腔機能や自食機能だけでなく心理面などでも発達変化が多くみられる^{1,2)}。一方で、その発達変化には個人差が大きく、食事の様子について保護者が疑問や不安を感じる点も多くなる時期である^{3,4)}。食事の問題については、児の年齢や離乳段階などによりその内容が変化すると報告されている^{5,6)}。また、乳幼児期の食事における問題点だけでなく、保護者の食事についての疑問や不安が児との食事時間における楽しさに影響を与えている可能性も指摘されている^{3,5)}。

乳幼児の食事については、離乳の進め方や食事の自立における指標が「授乳・離乳の支援ガイド」や母子健康手帳に記載されている⁷⁾。その中には、乳幼児期の食事の特徴や対応法などが記載され、育児支援の一

つとして用いられている。しかし、これらの育児支援や情報提供でもさまざまな保護者の不安はみられ、その不安軽減のための対応が求められている⁸⁾。また、これまでの研究において示された「食事における保護者の不安」については、食事場面における保護者の「食事の楽しさ」との関連を具体的に検討されている報告は少なく、保護者の不安な点と食事の楽しさの関連を明示することは、不安な点を解消するとともに食事の楽しさを提供する一助になると考えられる。

本研究では、乳幼児の食行動や食習慣についての新たな支援方法の確立の一助とすることを目的として、乳幼児の食事に関して保護者が意識する点を児の性別・年齢ごとに明確にするとともに、それらの点が保護者の感じる食事の楽しさに影響する要因となるかを検討した。

Relationship between the Issues of Parents about the Eating Behaviors of Preschool Children and Pleasure of a Meal

Takafumi OOKA, Akemi UTSUMI, Yoshiharu MUKAI

昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門（歯科医師）

別刷請求先：大岡貴史 昭和大学歯学部スペシャルニーズ口腔医学講座口腔衛生学部門

〒142-8555 東京都品川区旗の台1-5-8

Tel : 03-3784-8172 Fax : 03-3784-8173

[2471]

受付 12.10.18

採用 13. 5.20

II. 対象と方法

本研究の対象は、平成19年11～12月に東京都内某区の保育園14園にて行われた定期歯科健診に参加した保育園児およびその保護者1,271組であった。対象児のうち、保育園歯科健診実施日の時点で満1歳から2歳未満の児を1歳児とし、以下同様に2, 3, 4, 5歳児に分類した。対象児の年齢および性別を表1に示す。

定期歯科健診では、事前に保護者にアンケート用紙を配布し、対象児の歯や口の中および食事に関する疑問や不安を調査した。本研究では、その調査項目の中から食事に関する10項目を検討の対象とした。その内訳は、「かまない」、「丸飲み」、「時間がかかる」、「口に詰め込む（以下、詰め込む）」、「遊び食べ」、「食べる量にむらがある（以下、食べむら）」、「食事が少ない（以下、量が少ない）」、「好き嫌が多い（以下、好き嫌い）」、「スプーンがうまく使えない」、「フォークがうまく使えない」であり、該当する項目に○印を記入することで回答（複数回答可）を得た。また、特に気になる点がない場合には「特になし」の項目に○印を記入することとした。同じアンケート用紙内に、保護者が対象児の食事時間をどのように感じているかを調査する項目を設定した。対象児の食事について「楽しく食べている」、「あまり楽しんでいない」の2項目を選択肢として設定し、保護者が対象児の食事時間を楽しいと考えているかについていずれか一つを回答として得た。なお、1歳未満の乳児は人数が他の年齢群よりも少ないこと、調査の対象項目の一部が乳児には不相当であることから、調査対象から除外した。

調査対象の10項目の有訴割合について、男女それぞれの群で1～5歳児までの各年齢間の比較、および同年齢児群の男女間の比較を行った。10項目のうち1項目以上に「はい」と回答した保護者の割合を「対象児の食事に関する不安」の有訴割合とした。また、対象児の食事について「楽しく食べている」、「あまり楽し

表1 対象児の人数

	男児	女児	合計
1歳児	87	92	179
2歳児	129	109	238
3歳児	131	114	245
4歳児	129	116	245
5歳児	179	185	364
合計	655	616	1,271

んでいない」を選んだ割合が性別および年齢により差があるかを検討するため、各年齢の男児・女児群全体を対象としたカイ二乗検定を行った。さらに、対象児の食事について「楽しく食べている」、「あまり楽しんでいない」いずれかを選んだ対象者・児について、上記の2項目を目的変数とし、食事について気になる項目との関連を単変量ロジスティック回帰分析にてオッズ比、95%信頼区間およびp値を算出した。統計処理はSPSS 17.0を用い、統計学的有意水準は0.05とした。なお、本研究は昭和大学歯学部医の倫理委員会の承認を経て行われた（承認番号2007-09）。

III. 結果

「対象児の食事に関する不安」の有訴割合を図1に示す。最も低い数値は5歳女児の62%、最も高い数値は1歳女児の81%であった。

「対象児の食事について気になる点」の10項目のうち、「かまない」、「丸飲み」、「時間がかかる」、「詰め込む」の有訴割合を図2-1に示す。「かまない」では男女ともに1歳児で最も高く、それぞれ38%、39%であった。「丸飲み」は1歳男児で14%、1歳女児で9%と年齢群の中で最も高い値であったが、5歳男児は0%、5歳女児は0.5%と最も低い値であった。

「時間がかかる」では男女ともに3歳児が最も高率であり、それぞれ23%、27%であった。一方、1歳児は最も数値が低く、男児は8%、女児は5%であった。「詰め込む」は男女ともに1歳児で高率であり、それぞれ21%、14%であった。

「遊び食べ」、「食べむら」、「量が少ない」、「好き嫌い」の有訴割合を図2-2に示す。「遊び食べ」では、男児では2歳児、女児では3歳児がそれぞれ31%、37%と最も値が高く、5歳児では男児15%、女児12%と最も

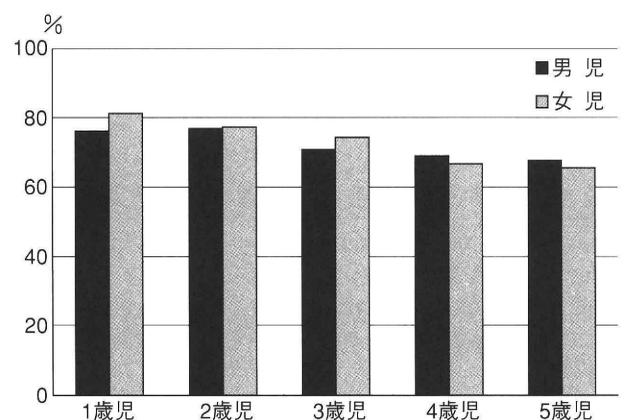


図1 対象児の食事に関する不安の有訴割合

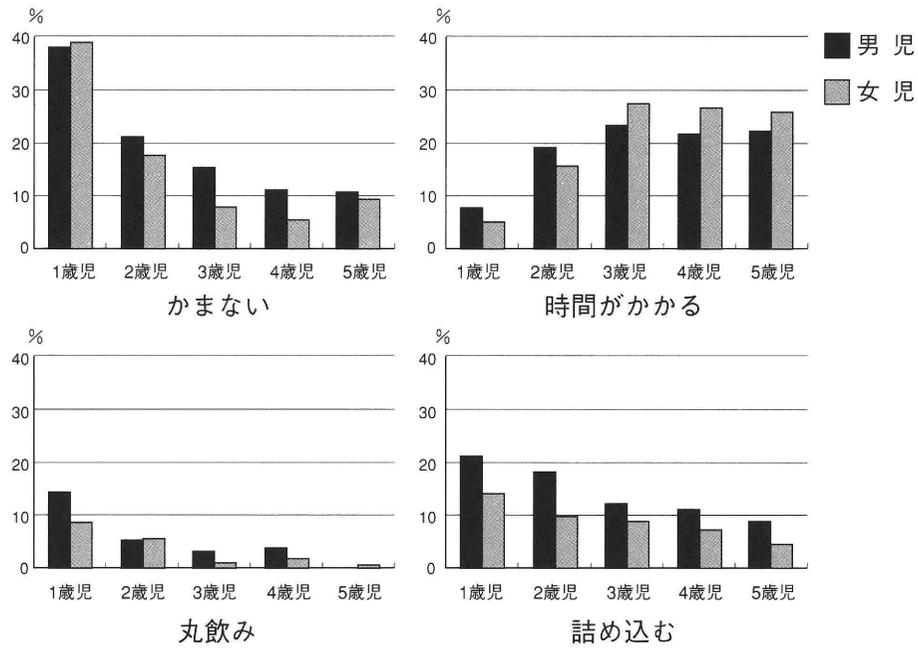


図 2-1 対象児の食事について気になる点の有訴割合 (かまない, 時間がかかる, 丸飲み, 詰め込む)

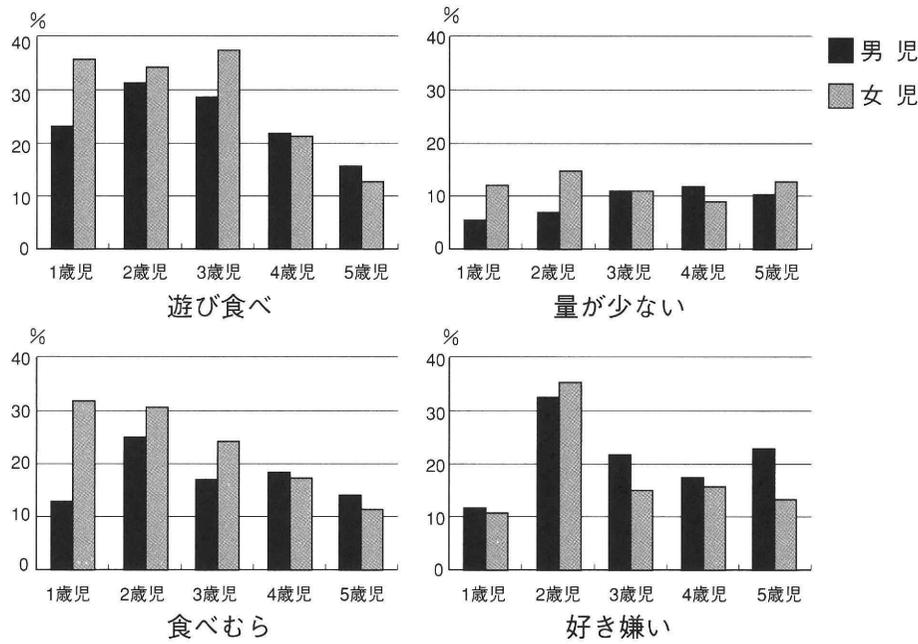


図 2-2 対象児の食事について気になる点の有訴割合 (遊び食べ, 量が少ない, 食べむら, 好き嫌い)

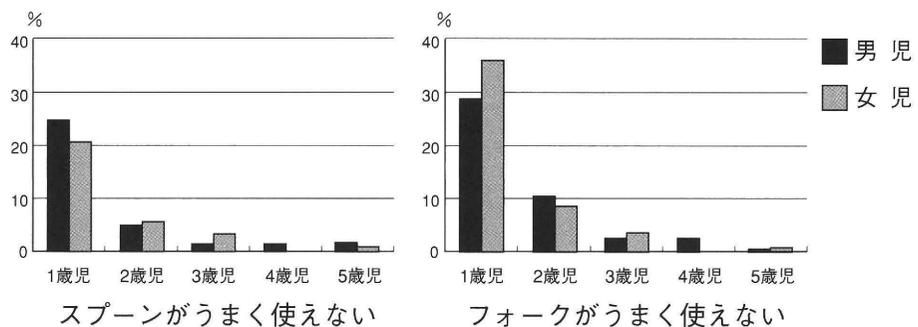


図 2-3 対象児の食事について気になる点の有訴割合 (スプーンがうまく使えない, フォークがうまく使えない)

低かった。「食べむら」では、男児では2歳児で25%、女児では1歳児で32%と最も高率を示し、反対に1歳男児と5歳女児でそれぞれ15%、11%と低い値であった。「量が少ない」では、4歳男児で12%、2歳女児で15%と最高値を示し、1歳男児で5%と最も低い値となった。「好き嫌い」では、男女とも2歳児で最も高い数値であり、それぞれ32%、35%であった。一方、最も低い値は男女ともに1歳児であり、それぞれ11%、10%であった。

「スプーンがうまく使えない」、「フォークがうまく使えない」の有訴割合を図2-3に示す。いずれの項目も1歳男児および女児で高い値を示し、「スプーンがうまく使えない」では男児25%、女児20%、「フォークがうまく使えない」では男児29%、女児36%であった。一方、4歳女児はいずれの項目も0%であり、男児で最も低い数値を示した年齢は「スプーンがうまく使えない」で3歳児および4歳児（いずれも1.2%）、「フォークがうまく使えない」で5歳児（0.3%）であった。

児の食事について、「楽しく食べている」、「あまり楽しんでいない」それぞれの回答の割合を図3に示す。「楽しく食べている」が最も高率であった群は1歳児で、男児は89%、女児は94%であった。一方で、「あまり楽しんでいない」が最も高率であった群は4歳児であった（男児17%、女児19%）。それに続き高い割合を示したのは男児では2歳児の15%、女児は3歳児の17%であった。回答の割合について全ての年齢・性別を対象として「楽しく食べている」、「あまり楽しんでいない」の割合の差についてカイ二乗検定を行った

ところ、年齢あるいは性別による差はみられなかった($p=0.39$)。

「食事の楽しさ」に影響を及ぼす「児の食事について気になる点」の各項目の分析結果のうち、1歳児および2歳児の結果を表2-1に示す。1歳児では、男児で「時間がかかる」(オッズ比7.13)、女児で「量が少ない」(オッズ比9.6)の各1項目で有意な関連がみられたのみであった。2歳男児では「時間がかかる」、「遊び食べ」、「食べむら」、「量が少ない」で有意な関連がみられ(それぞれオッズ比5.0, 4.1, 4.0, 74.2)、女児では「時間がかかる」、「詰め込む」、「食べむら」、「量が少ない」(それぞれオッズ比3.8, 4.7, 11.4, 5.3)で、有意な関連がみられた。

3歳児および4歳児についての結果を表2-2に示す。3歳男児では「量が少ない」でオッズ比が6.8、女児では「食べむら」、「量が少ない」でそれぞれオッズ比が9.7, 5.3となり、有意な関連がみられた。その他の項目では有意な関連はみられなかった。4歳男児では「時間がかかる」、「遊び食べ」、「量が少ない」の3項目で有意な関連がみられた(それぞれオッズ比5.7, 5.5, 6.8)。女児では「食べむら」、「量が少ない」の2項目で有意な関連が示され、それぞれオッズ比は4.1, 3.6であった。

5歳児についての結果を表2-3に示す。男児では「食べむら」のみで有意な関連がみられ(オッズ比8.8)、女児では「時間がかかる」、「量が少ない」、「好き嫌い」の3項目で有意な関連がみられた(それぞれオッズ比3.2, 5.1, 3.3)。

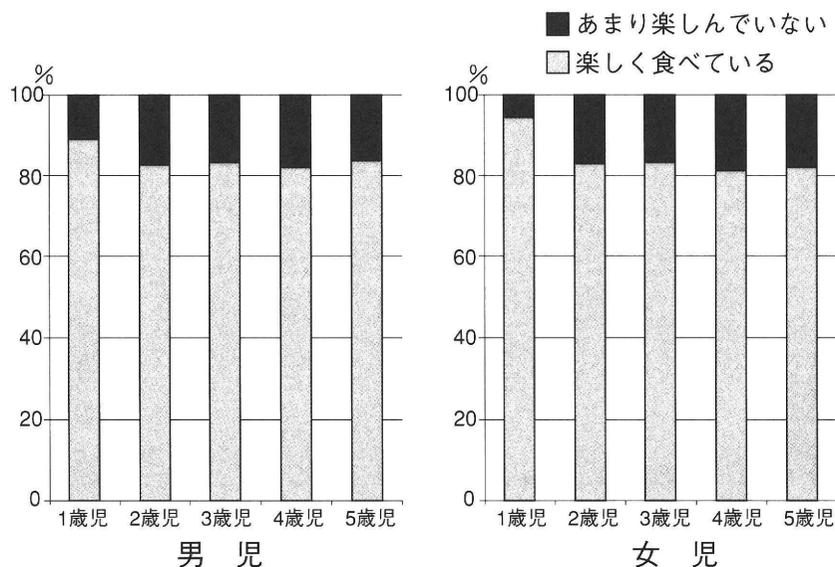


図3 食事の楽しさについての回答

表 2-1 食事の楽しさと食事について気になる点との関連 (1歳児, 2歳児)

項目	1歳男児			1歳女児			2歳男児			2歳女児		
	オッズ比	95%信頼区間	p値	オッズ比	95%信頼区間	p値	オッズ比	95%信頼区間	p値	オッズ比	95%信頼区間	p値
かまない	0.95	0.26~3.5	0.99	0.21	0.04~1.1	0.32	1.0	0.31~3.4	0.07	1.1	0.28~4.4	0.99
丸飲み	1.4	0.27~7.3	0.62	1.1	0.12~9.9	0.99	0.97	0.11~8.6	0.99	3.0	0.50~17.7	0.23
時間がかかる	7.13	1.35~37.7	0.03*	2.0	0.20~19.7	0.46	5.0	1.73~14.7	0.004**	3.8	1.1~13.6	0.04*
詰め込む	1.11	0.21~5.7	0.99	1.44	0.47~4.4	0.54	1.44	0.47~4.4	0.54	4.7	1.2~18.9	0.04*
遊び食べ	0.37	0.04~3.1	0.68	2.69	0.74~9.6	0.17	4.1	1.5~11.1	0.006**	1.6	0.48~5.0	0.54
食べむら	4.7	1.2~18.0	0.28	1.3	0.36~5.0	0.73	4.0	1.5~11.0	0.009**	11.4	2.9~45.4	<0.001**
量が少ない	4.1	0.89~19.2	0.08	9.6	2.3~40.0	0.003**	74.2	14.5~380.0	<0.001**	5.3	1.7~16.5	0.005**
好き嫌い	0.79	0.09~6.9	0.99	1.6	0.31~8.7	0.62	3.0	1.1~8.1	0.03*	2.9	0.88~9.3	0.11
スプーンがうまく使えない	1.53	0.45~5.2	0.52	0.81	0.16~4.1	0.99	4.2	0.66~27.2	0.15	3.2	0.55~18.5	0.20
フォークがうまく使えない	1.7	0.45~6.5	0.46	0.58	0.14~2.3	0.52	2.4	0.58~10.0	0.20	3.7	0.82~16.6	0.10

* : p<0.05, ** : p<0.01

表 2-2 食事の楽しさと食事について気になる点との関連 (3歳児, 4歳児)

項目	3歳男児			3歳女児			4歳男児			4歳女児		
	オッズ比	95%信頼区間	p値	オッズ比	95%信頼区間	p値	オッズ比	95%信頼区間	p値	オッズ比	95%信頼区間	p値
かまない	1.4	0.43~4.8	0.52	0.36	0.04~2.9	0.46	1.2	0.30~4.5	0.46	5.7	1.3~25.0	0.03*
丸飲み	5.5	0.73~41.3	0.12	5.8	0.35~97.7	0.28	3.8	0.60~24.4	0.17	10.5	0.91~122.0	0.07
時間がかかる	2.6	0.97~7.1	0.08	1.15	0.37~3.6	0.77	5.7	2.1~15.5	<0.001**	2.8	1.05~7.3	0.06
詰め込む	0.29	0.03~2.3	0.3	1.96	0.36~10.6	0.35	0.63	0.13~2.98	0.73	2.1	0.52~8.9	0.38
遊び食べ	1.0	0.36~2.9	0.99	2.8	0.96~8.0	0.06	5.5	2.0~14.5	<0.001**	1.5	0.5~4.8	0.53
食べむら	2.0	0.67~5.7	0.22	9.7	3.1~30.1	<0.001**	2.8	0.98~7.9	0.06	4.1	1.4~12.3	0.02*
量が少ない	6.8	1.9~23.8	0.005**	5.3	1.7~16.5	0.006**	6.8	1.9~23.8	0.004**	3.6	1.1~12.0	0.04*
好き嫌い	0.76	0.25~2.3	0.67	2.4	0.73~7.8	0.16	0.81	0.22~3.0	0.99	1.25	0.37~4.2	0.74
スプーンがうまく使えない	0	-	0.99	4.0	0.62~26.3	0.16	0	-	0.99	-	-	0.99
フォークがうまく使えない	5.3	0.32~87.9	0.30	2.9	0.25~33.6	0.39	0	-	0.99	0	-	0.99

* : p<0.05, ** : p<0.01

表 2-3 食事の楽しさと食事について気になる点との関連

項目	5歳男児			5歳女児		
	オッズ比	95%信頼区間	p値	オッズ比	95%信頼区間	p値
かまない	2.2	0.80~6.2	0.12	2.5	0.93~6.7	0.07
丸飲み	0	-	0.99	0	-	0.99
時間がかかる	1.2	0.49~3.2	0.62	3.2	1.4~7.2	0.008**
詰め込む	0.88	0.1~7.5	0.99	1.3	0.40~4.2	0.75
遊び食べ	2.2	0.84~5.8	0.14	1.9	0.81~4.7	0.14
食べむら	8.8	3.5~22.4	<0.001**	2.1	0.97~4.7	0.08
量が少ない	3.3	1.2~9.1	0.02*	5.1	2.0~13.2	0.001**
好き嫌い	2.1	0.80~5.5	0.15	3.3	1.5~7.3	0.005**
スプーンがうまく使えない	0	-	0.99	0	-	0.99
フォークがうまく使えない	0	-	0.99	0	-	0.99

* : p<0.05, ** : p<0.01

本研究では対象児を年齢・性別によって合計10群に分類したが、有意な関連がみられた年齢・性別群の数を10項目それぞれで集計すると、最も多くの年齢・性別群で有意な関連がみられたのは「量が少ない」(9群)であり、次いで「時間がかかる」,「食べむら」(いずれも6群)となった。一方、「丸飲み」,「スプーンがうまく使えない」はいずれの年齢・性別でも有意な

関連はみられず、「かまない」,「詰め込む」の項目はそれぞれ1群のみで有意な関連がみられた。

IV. 考 察

乳幼児期の食事については、口腔領域の形態変化、口腔機能の発達、心理的な自立など多くの面で経年期的な変化がみられる¹⁹⁾。一方で、その変化の個人差や

食事の自立によって保護者が食事について疑問や不安を抱くことも多い時期である^{35,10)}。これまでの研究で、乳幼児の食事に関する保護者の疑問や不安は幼児期全体にわたること、その内容は離乳の進み具合や食事形態、食具の使い方など多岐にわたることが報告されている³⁵⁾。本研究では、保護者が食事の時間に感じる「楽しさ」に影響を及ぼす要因を明らかにするため、幼児の食事における気になる点と保護者の食事の楽しさとの関連を幼児の年齢および性別ごとに解析を行った。ただし、食事に関する多因子についての解析は行わず、保護者の食事の楽しさと食事における気になる点のみについて検討を行った。

対象児の食事に関する不安を持つ保護者の割合は、男児で65~78%、女児で62~81%と性別による差は少なかった。これまでの報告では、1~3歳児の食事について80%以上の保護者が何らかの疑問や不安を抱いていることが示されており、本研究の結果はこれらの報告とほぼ同様の傾向が得られたと考えられる³⁴⁾。

食事について気になる点については、年齢によって有訴割合が大きく変化していた。「かまない」、「丸飲み」は咀嚼機能の未発達によるものと考えられるが、それぞれ最も高い頻度は1歳児であった。幼児の咀嚼機能は歯列の成長とも関連があり、3歳で乳歯列が完成するとされる¹¹⁾。それに伴って咀嚼機能も一定の発達段階に達するとされるため、その機能が発達途上にある年齢では不十分な咀嚼回数で嚥下すると考えられる¹²⁾。そのため1歳児では上記2項目が気になる保護者が多く、2歳児以降は有訴割合が低下したものと推察される。一方、2歳児以降は介助食べから自食の頻度が増えていく時期とされており、その時期には食事時間の延長や遊び食べ、ちらかし食べなどの様子が増えるとされる^{13,14)}。また、自食時の問題の一つに食事ペースや一口量のコントロールが困難であるとされており、これらの問題が2~4歳児の「詰め込む」、「時間がかかる」、「遊び食べ」、「食べむら」などの不安な点として挙げられたのではないかと考えられる¹⁵⁾。反対に、自食の上達によって自食動作が未熟な1歳児にスプーンやフォークの扱いを気にする保護者の割合が多く、その後の年齢では数値が低くなったものと考えられる。

保護者が考える食事の楽しさについては、80%以上が「楽しく食べている」と回答した一方で、4歳児で20%近くの保護者が「あまり楽しんでいない」と回答

しており、幼児の食事に際して何らかの負担を感じている保護者がいると考えられる。乳幼児の食事についての保護者が注意している点として、栄養バランスやマナーなど多くが挙げられているが、その中で「楽しく食べることを」挙げた保護者も60~70%という割合であり、乳幼児期を通して「食事の楽しさ」に重点を置く保護者が多いことが示されている³⁾。しかし、実際の乳幼児の食事の楽しさでは保護者の43~65%しか「楽しく食べている」と感じていないとの報告がみられる⁵⁾。先行研究および本研究の結果から、多くの保護者が乳幼児の食事を楽しんでいる一方で、何らかの理由によって食事時間を楽しめない保護者も少なくないことが示唆された。前述のように、保護者の多くは乳幼児の食事について何らかの不安や疑問を抱いているが、不安や疑問点は多岐にわたること、幼児の年齢によって保護者が不安や疑問を抱く点が多くなることから、食事の楽しさとこれらの点との関連は明確にされていない。幼児の食事に保護者が満足している場合は幼児との食事時間を長く取る傾向があり、共食によって食事の楽しさが高められることが示唆されている¹⁶⁾。そのため、幼児とともに食事をする際、何らかの不安が食事の楽しさを妨げている可能性が考えられ、本研究では食事の楽しさと食事について気になる点との関連を単変量解析にて検討した。

1歳児では、男児で「時間がかかる」、女児で「量が少ない」の項目と食事の楽しさとの間に関連があり、これらの疑問や不安が保護者の食事の楽しさに影響すると考えられる。1歳は離乳完了を経て自食へと進む時期であり、その過程で「遊び食べ」、「ちらかし食べ」などがみられることで食事時間が延長することが多いとされる³⁾。さらに、保護者が食事の時に気になる点として「幼児の食事中的行動」を多く挙げており、スプーンで皿をたたくなどの行動を保護者が嫌う傾向があるとされ、食行動が保護者の関心の中心となると考えられる¹⁷⁾。また、1歳児の食事で気になる点として「遊び食べ」などが挙げられることが多いこと、それらの特徴は主に保護者の介助にて食事を進める離乳期とは大きく異なる点であることから、保護者の楽しさへ大きな影響を与えているのではないかと推察される。

2歳児では男女ともに「時間がかかる」、「食べむら」、「量が少ない」など多くの項目で食事の楽しさに影響を与えることが示され、3歳児では有意な関連がみら

れた項目数は少ないながら「量が少ない」の項目は男女ともに食事の楽しさとの関連があると考えられる。これらの中でも「量が少ない」は4歳児, 5歳児でも高いオッズ比を示し, 食事の楽しさに影響を与える要素であることが示唆される。これまでの報告で, 自食や食事の自立がなされた幼児では, 保護者は食行動だけでなく摂取量への関心が高くなるとされる^{18,19)}。特に家庭での食事は保護者自らが用意するため, 食事摂取量が確保できない, あるいは時間がかかるという事象は保護者の満足感にも影響を与える可能性が考えられ, 食事の楽しさを減じる大きな要素であると推察される。一方, 「かまない」, 「好き嫌い」, 「フォークがうまく使えない」などの項目は高い有訴割合であったが, 食事の楽しさとの間にはほとんど有意な関連がみられなかった。これらは食行動上の問題としては保護者の関心が向けられるものの, 調理形態の工夫や介助法などによって問題なく食事を進められる要因であると考えられた^{6,7)}。

以上から, 乳幼児の食事に関しては多くの保護者が何らかの不安を感じることで, その内容は年齢によっても大きく変化することが示唆される。また, 乳幼児の食事を楽しく感じられない保護者も約2割いることが示され, 食事を楽しく感じられないことを助長する要素として幼児の遊び食べや食べむら, 食事の摂取量が少ないといった食行動が含まれることが示唆される。これらの食行動や事象は決して珍しいことではないものの, その頻度や程度によっては食事の進み方が保護者の想定とは異なり, それによって幼児の食事を負担と感じる原因となる可能性があると考えられる。しかしながら, 本研究では食事の楽しさと各項目を単変量ロジスティック回帰解析のみで検討していること, 家族構成や食事時間の長さ, 食事の時刻などを考慮していないことから, 他の要因が食事の楽しさに大きく影響している可能性も否定できない。今後は対象項目を再検討し, 要因同士の関連も含めた調査が必要になると考えられた。

V. 結 論

幼児の保護者の多くが幼児の食事について何らかの不安を持ち, 特に食事摂取量や食行動に関する項目は保護者の食事の楽しさを減じる要因となることが示唆された。乳幼児の食事の進め方に不安を持つ保護者については機能面・栄養面のみならず食事の問題点や実

態に対応した支援が必要であると推察された。

謝 辞

稿を終えるにあたり, 本研究に際して終始御理解と御協力を頂きました東海林文夫東京都中央区保健所長をはじめ中央区保育園歯科健診事業および日本橋保健センター, 月島保健センター, 関係各所の方々に厚く御礼申し上げます。

文 献

- 1) 向井美恵. 摂食機能の発達. 小児保健研究 1989; 48: 309-313.
- 2) 尾本和彦. 乳幼児の摂食機能発達(第1報)行動観察による口唇・舌・顎運動の経時変化. 小児保健研究 1992; 51: 56-66.
- 3) 厚生労働省. 平成17年度乳幼児栄養調査結果 2006. <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/06/dl/h0629-1b.pdf> (平成24年10月5日アクセス)
- 4) 大岡貴史, 坂田美恵子, 野本富枝, 他. 乳幼児の食事や口腔内の状況に関する保護者の疑問や不安についての実態調査. 口腔衛生会誌 2011; 61: 551-562.
- 5) 大岡貴史, 石川健太郎, 村田直道, 他. 離乳期の食事についての保護者の疑問や不安に関する実態調査. 口腔衛生会誌 2009; 59: 7-15.
- 6) 亀崎明子, 田中満由美, 野崎亜希. 乳幼児期の子どもをもつ母親への栄養指導と離乳食の実態. 山口県母性衛生学会会誌 2011; 27: 12-17.
- 7) 堤ちはる. 食育と保育に関して「授乳・離乳の支援ガイド」について. 小児科 2010; 51: 1411-1416.
- 8) 河野順子. 母親が抱える育児不安に関する要因—子どもの育てにくさ, 母親の認知様式, 父親の育児参加をめぐって. 東海学園大学研究紀要 2011; 16: 55-64.
- 9) 瀬野由衣. 幼児期の心の理解の発達—主な理論と今後の展望. 名古屋大院教発達科研科紀 2009; 55: 91-103.
- 10) 坂間伊津美, 松田宣子. 乳児をもつ母親の育児不安と育児情報の利用意識との関連. 茨城キリスト教大看紀. 2011; 16: 55-64.
- 11) 林 寿男, 仲岡佳彦, 小山和彦, 他. 乳歯萌出と咀嚼筋活動の変化から検討した乳幼児期の咀嚼発達. 小児歯誌 2002; 40: 32-45.
- 12) 尾本和彦. 乳幼児の摂食機能発達(第2報)咬反射,

- 吸啜および咀嚼の筋電図学的検討. 小児歯誌 1993 ; 31 : 657-668.
- 13) 杉浦ミドリ. 3歳児の食行動と, その発育への影響に関する研究. 小児保健研究 1998 ; 57 : 777-784.
- 14) 八倉巻和子, 村田輝子, 森岡加代, 他. 幼児の食行動に関する研究 「遊び食べ」行動分析の事例 (第1報). 小児保健研究 1997 ; 56 : 749-756.
- 15) 大久保真衣, 田村文誉, 倉本絵美, 他. 摂食機能発達を考慮した自食スプーンの研究—ハンドル部とボール部の角度の違いによる捕食動作への影響—. 小児保健研究 2002 ; 61 : 503-511.
- 16) 武藤慶子, 道辻 彩, 中 淑子. 母親の食習慣の背景因子に関する研究. 長崎シーボルト大看栄紀 2007 ; 7 : 9-21.
- 17) Quick BL, Fiese BH, Anderson B, et al. A formative evaluation of shared family mealtime for parents of toddlers and young children. Health Commun 2011 ; 26 : 656-666.
- 18) Birch LL, Davison KK. Family environmental factors influencing the developing behavioral controls of food intake and childhood overweight. Pediatr Clin North Am 2001 ; 48 : 893-907.
- 19) 堀内ゆかり, 堀内雅弘. 食事摂取と食行動に対する親の意識が子どもの身体特性におよぼす影響. 北海道医療大心理科研紀 2009 ; 4 : 11-17.

[Summary]

The aim of this study was to be part of the establishment the new support system for infants regarding eat-

ing behavior. Therefore, questionnaire investigation was carried out about the varieties of the anxiety of parents regarding feeding situation and the pleasure in mealtime of 1,271 pairs of kindergartens and their parents who attended the dental checkup in a certain ward of Tokyo metropolitan.

As a result, the matter 'not chew enough' showed the high percentages of the parents in 1-year-old group and the matter of 'prolonged mealtime' showed the high percentages in children in age from 3 to 5. In addition, the percentage of the matter of 'playing during a meal' was higher in children in age from 1 to 3. On the other hand, the matter of 'low amount of intake' showed to be 16% in 5-year-old children. The percentage of 'feeling pleasure of mealtime' in parents was highest in 1-year-old girl (94%) and lowest in 4-year-old girl (81%). The odds ratio to 'feeling not pleasant in mealtime' was higher in the matter of 'low amount of intake' and 'variable in amount of intake'.

These results suggested that the various matters concerning eating behaviors and progress of meal of children such as amount of food intake can affect the pleasure of their parents in mealtimes and it may be needed to support multilaterally for the parents have some kind of anxiety about their children.

[Key words]

children, feeding, pleasantness, contents of the anxiety, attribution analysis